

お母さんのやくそく

奄美市立市小学校 四年 浅野 恵深

【旅を続ける理由】

「ここは、ちがうな。」

オヒルギは海水面をただよいながら、小さくため息をつきました。東南アジアの小さな島を出発してから何千キロ。ゆらりゆらりと海流に流されながら北へと進みます。何百の朝と何百の夜を送る間に、オヒルギは海の香りを覚え、かもめと話すこともできるようになりました。ひとりぼっちでさみしいと思うこともありましたが、そんな時はお母さんの言葉を思い出すのでした。

「自分が心からここにいたいと思うところに根を下ろすのよ。そのためには、自分の心の声に耳をすまして自分の力を信じるの。必ずあなたがかがやける場所があるわ。もし、わたしたちが旅をする中で、はなればなれになったとしてもだいじょうぶ。わたしはあなたと出会えたことを心からうれしく思っているわ。」

お母さんの言葉はいつでもオヒルギをはげまし、「ぼくはぼくのままでいいんだ」と強く思わせてくれるのでした。

太陽が降り注ぐ南の島の近くの海水とたん水がま

ざり合う場所をお母さんはとても気に入りました。お母さんはお母さんがかがやける場所を見つけたのです。

「ぼうや、ここでお別れにしましょう。お母さんはこの地が気に入ったわ。どこかにあなたがかがやけるすばらしい場所がきっと待っている。さあ、わたしのかわいいぼうや、行つてらっしゃい。勇気をもって。」

【出会い】

大きな岩を飲みこむほど根をはった、太いガジュマルが海岸線に見えます。白波の間から

「助けてくれえ。だれかいなか。」

と声が聞こえてきました。オヒルギが目をこらすと、小さなミナミトビハゼが、体をふるわせながらガジュマルの根元にしがみついているではありませんか。

「どうしたんだい。」

オヒルギがたずねると、

「この前の台風で、ぼくの住む島は二つにわれてしまったんだ。ぼくがいた方はここまで流れてきたというわけ。でもこちらがわには食べ物もない。この先どうすれば。」

そう言って、ミナミトビハゼはぶるぶるとふるえました。

「泳いで帰れないのかい。われた島は向こうにうつすら

見えてるよ。君のヒレはりっぱだ。きっとすぐだよ。」

そうオヒルギが言うと、ミナミトビハゼはとび上がってさけびました。

「君、なんておそろしいことを言うんだい。ぼくらはハゼとは名ばかりで、水がきらいなんだ。水が来るとどろの中ですぐににげこむくらいだからね。」

と頭をかかえました。

「ぼくだって、新しい場所に行きたいよ。でも、水がこわくて何もできない。どうして水ぎらいにぼくらは生まれたんだろう。」

「君は君のままでいいんだ。新しい場所に行きたい、という気持ちは何より大切さ。そうだ、ぼくの背中に乗るといい。きっとすばらしい場所が見つかるはずさ。」

【新しい地へ】

二人はたくさん朝と夜を数えました。波の静かな夜のこと、

「勇気あるりっぱな二人だこと。自分にふさわしい地をさがして旅をしているのね。」

やさしくよびかけるのは、大きな大きなお月様。銀色の光はすべてを静けさに包みます。

「小さな二人の大きな勇気をたたえて。」

お月様はそう言うのと、いつそうかがやきをましました。

すると、深いこん色の空に美しいにじがかりました。それも二重に。

「このにじの一つはこれまでの勇気に。もう一つは、これからの未来に。」

お月様はほえみました。そうしてにじの向こうを明るくてらしました。暗い水面にうかんだ銀色の道を、オヒルギとミナミトビハゼはみちびかれるように進みます。銀色の光にてらされた山々。広がる干がた。山々にかこまれたその土地を二人はずっと前から知っているような気がしました。

「ここがぼくらの新しい場所だ。」

静かな静かな夜に、二人はついに自分のいるべき場所を見つけたのです。オヒルギは、お月様を見上げました。

「あなたはあなたのままで。心からここにいたいと思うところに根を下ろすのよ。」

オヒルギにはお母さんのやさしい声はつきりと聞こえたのでした。

奄美大島の東、住用。マングローブの林は命のゆりかごととしてその豊かな自然をはぐくんでいます。